

# 天然ブリ仔資源保護培養のための 基礎調査実験（抄録）

北沢博夫

日本栽培漁業協会から委託された天然ブリ仔資源保護培養のための基礎調査実験で、ブリ幼魚の生態を明らかにするために、ブリ当才魚の標識放流と島根県における養殖用モジャコ採捕漁船の操業実態調査を行なった。また、あわせて、ブリ漁業の実態を調べ、過去の漁獲統計を用いて統計学的に分析した。詳しくは日本栽培漁業協会発行の「協会研究資料 No25 1983」に報告されているので、ここでは要約を述べる。

## 要 約

**標識放流調査** ブリ若年魚の移動を調べるために標識放流を行なった。モジャコは6月（体長モード5～6cm）と8月（同11～12cm）の2回、3地点で計2550尾を放流したが、再捕報告は8月放流群の1尾であった。0才魚のハマチは12月（体長モード32～33cm）に1地点で314尾放流した。放流翌日の再捕率が約30%であったが、昭和58年5月までの再捕率は41.7%である。再捕場所と再捕までの経過日数から考えて、島根半島周辺では冬～春期にかけて、滞留（越冬）しながら西南方向へ移動したと推察された。

**モジャコ調査** 漁獲実績報告からモジャコの加入量を推察すると年によって大きく変動すると考えられる。さらに、1日1隻当たりのC P U Eから漁期間中のモジャコの漁獲変動には10～15日程度の周期性が示唆された。

**島根県におけるブリ漁業の実態** 農林統計からみた島根県におけるブリ漁獲量の経年変化は、漸増の傾向にあるが、漁業種類別ではまき網と刺網が増加傾向、定置網が減少傾向にある。海區別の漁獲量の相関関係は、石見と出雲の両海区の間に有意な相関があり、隠岐海区は他の2海区と無相関であった。自己相関係数から求めた短周期は石見、出雲の両海区では認められないが、隠岐海区では6年が認められた。定置網漁獲量の日別変化からは、1～2才のブリ若年魚が隠岐諸島周辺で長期滞留する傾向にあることが認められた。益田市と多伎町の銘柄別漁獲量からは、当才魚のツバスが島根県沖合を8月から11月の長期間滞留している可能性が示された。

**漁獲統計の分析** 1954年以降、全国的には約45,000 t という一定の漁獲水準が維持されている。

しかし、長期傾向からの残差変動が近年大きくなっていること、若年魚の漁獲比率が大きくなってきていることから考えて、資源状態は必ずしも良くないものと考えられる。漁獲量からみた各海区、各県の相関関係は、東シナ海区の各県と関係があるのは兵庫県以西であり、日本海北区の各県は海区内の各県および日本海西区の島根県、兵庫県と相関がある県が多かった。漁業種別にみた漁獲量は、まき網、刺網が増加傾向、定置網が減少傾向にあった。